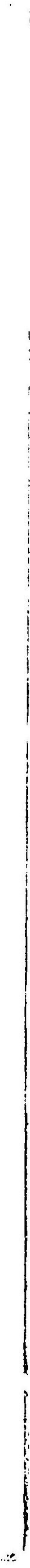
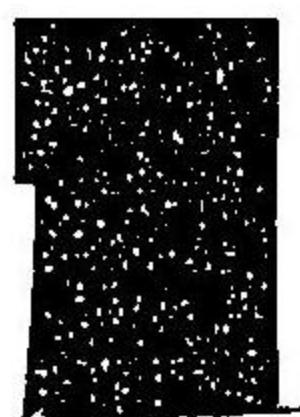


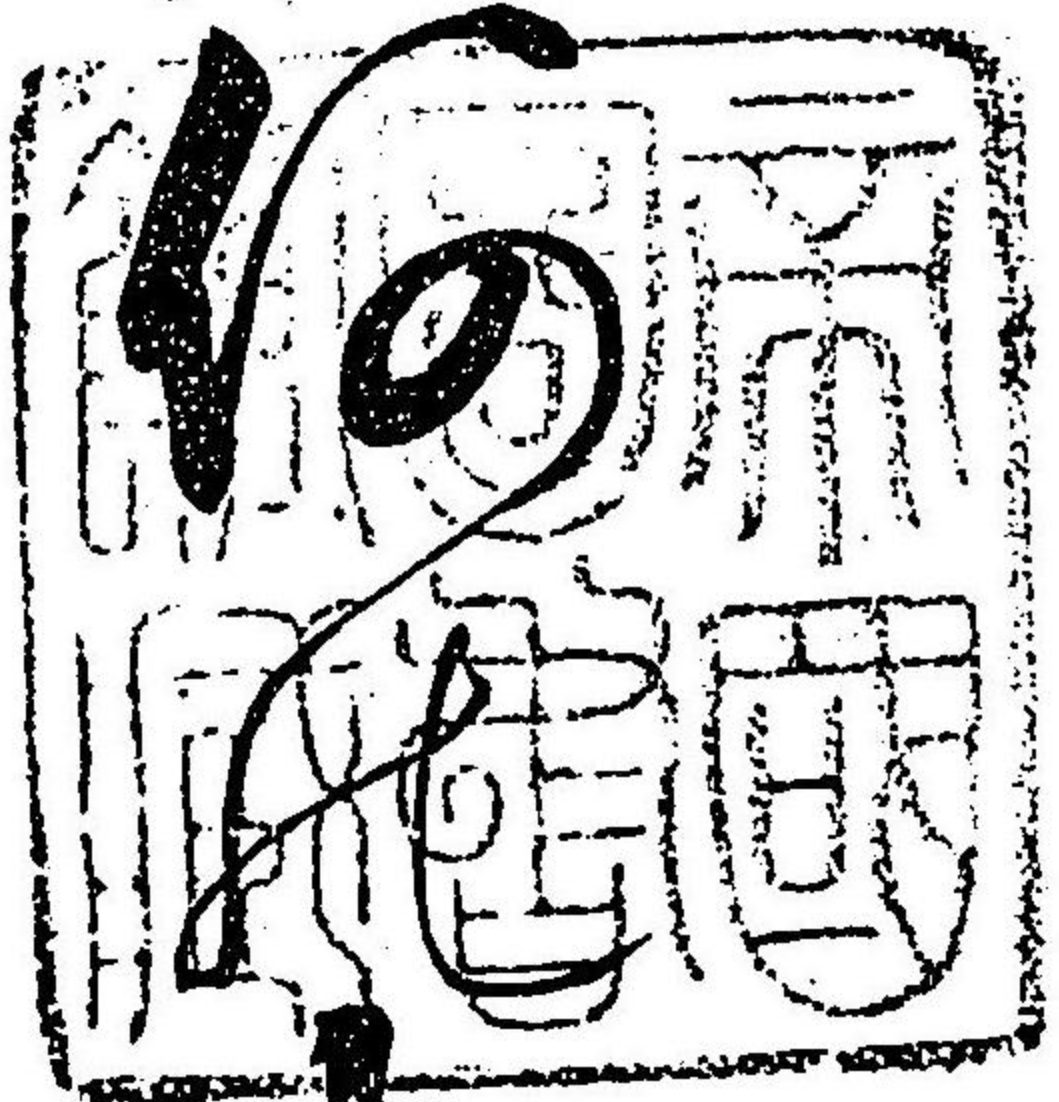
103

349

神都の美やけ



103-309



木村

木村 文子

木村 文子



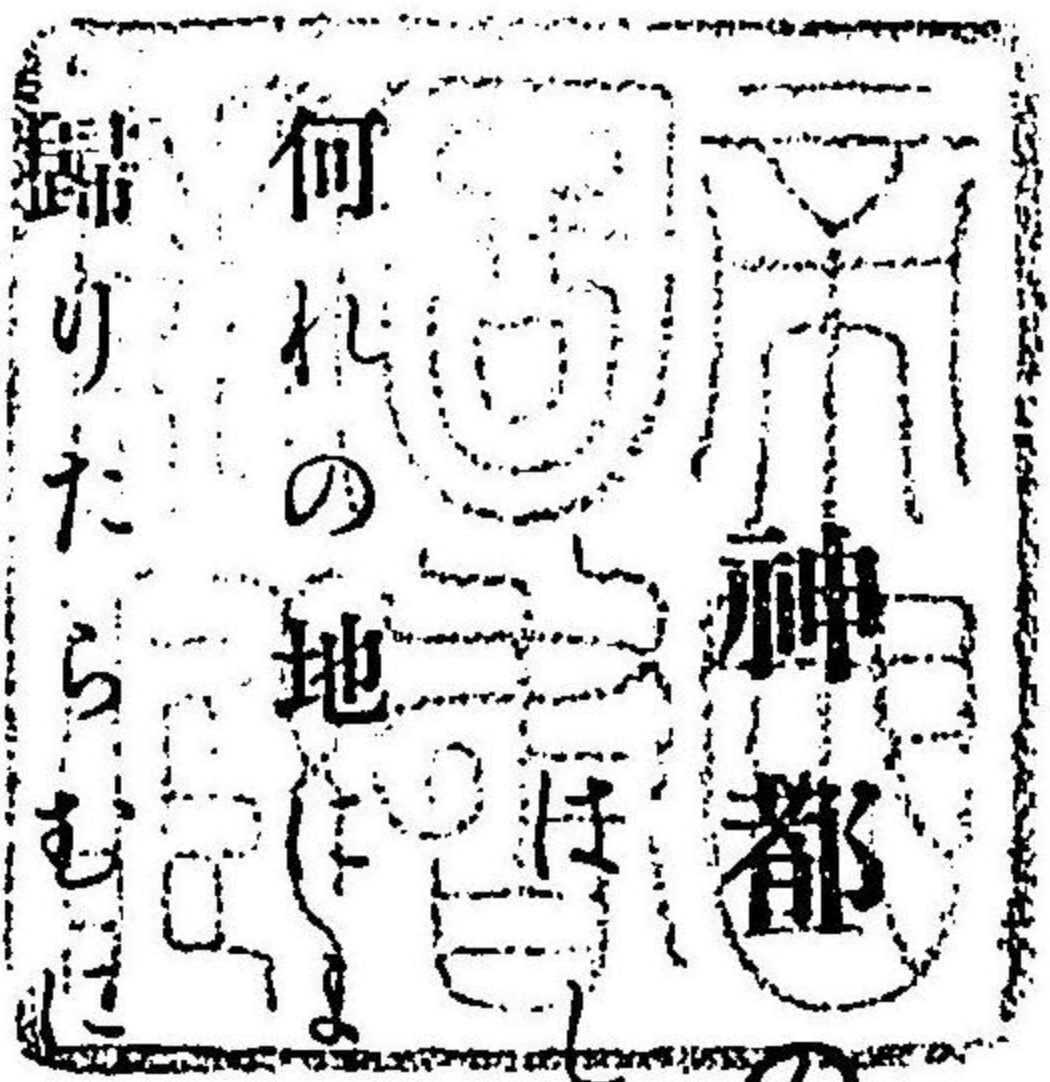
木村 文子

子一あき

凌雲

のきりまき

あきり



神都のみやげ

かき

何れの地（神都）に参り、面白き處に到りて家に
歸りたらむは、さありしかくありしなど、人々に語らんとは

誰しもおもふとならん

されど山を踰へ海を渡りて日數を重ねれば、忘るゝととも
尠ならず、人に物語りするにも、その場にて急に思ひ出すとは、難き
事にぞありける、己れ往ぬる年、伊勢の御社（伊勢神宮）に詣てしが、沿道は
名に負ふ東海の濱邊なれば、空しく車の廂より眺め、又は遠く
望みて懐ひを走せ打過ぎむは、いこ名残り惜きとなれば、都通
ひの五十路に餘る宿場海邊（宿場海邊）に一々下車なして、風景を賞たへ

さらに洛中洛外浪華より、南海の琴平を訪ね、山陽の海げしきに飽きつ、遠く安藝の宮島に棹しければ、これらの見物に心紛れて宮居詣では忽がせになりしかば、這回は先に見洩せし二三の古跡めぐりを兼ねて専ら神の都を残りなにさぐりたりさればむなしく一片の夢を消ひ忘れ果てむは、心苦しき限りなれば、已れが目に觸れ耳に聞江たるものを集めて、鴨の足よりいこ短き水莖の跡をこめつ、靈ある山と神ある水とに酬ひ、且つは後々の紀念にしてけれども、拙なき文の能く其意を描き得ざるは、余の深く憾みとする所なり

明治己亥歲早月の末つがた

編者しるす

神都のみやけ

玉くしけ綾にかしこき伊勢の國、山田の里にいや高く、稜威もいこど嚴かに、鎮座御在す御社に、打詣でんと豫てより、志ある人々もて講中といふを組織しか、今茲は總へて十九人を選びつ、余も亦その内に加はりて、早月のはじめ打揃ふていさ旅立つととなりぬ

爽かな恵みの旅や五月晴

凌雲

脚絆鞋草は夢なれや、振別け荷物は昔にて、余等一行は揃衣の緋いと軽々と打扮ち、二荒山へ神かけて、停車場へと打向ひぬ
爵の宮の青葉蔭、時鳥啼く曉天の、日和よく晴れたれば、孰れも頼も勇み立ちて、白木屋旅館に打集ひぬ、這は去る有志者より、余等が門出の祝ひごと、贈り越されし酒樽のかきみ打ぬき侷むれば、邊りは一入賑ひを増しぬ
臆がて定刻もなりたれば、送れる人よ別れを告げ、上りの

流車に打ち乗る程に、早くも煙りを吐て動るぎ出しぬ
故郷を黒烟ごとも後にしつ、築波の山に名残を告げ、坂東
太郎に暇を白し、敷ある驛を打越へて、停るは上野の停車場
都の塵を身に浴びつ、新橋驛へ馳せ着て、山田の切符を求む
れば、身は乗詰め客となりぬ
昔は宿場の筆がしら、品川驛は瞬く間、いと有難き代り大森
の、八景園も早過ぎて、川崎鶴見を後に見つ、左に眺がむ松
原や、遠近見ゆる真帆片帆、神奈川驛の中央を、通り貫くれ
ば横濱へ、早くも着て別線路、幾程が谷も過ぎ行けば、戸塚
を越へて大船に、鎌倉行きと道を分け、名ある藤澤遊行寺の
紫匂ふ藤の花、指さす方の青嵐、松原行けば露の垂る、馬入
の川も早渡り、大山行きの分れ道、平塚越へて大磯の、海水
浴は世に高し、虎が涙は今もなほ、名所み残る西行の、鳴立
澤の歌ばなし、國府津々々と呼ぶ聲み、箱根の客は皆降り
ぬ

昔は宿場に名を得たる、小田原驛は程近し、行來ふ人を改め
し、箱根の關所も夢の跡、鉄道乗合電氣馬車、道行く人は憾
みなし、七ツの湯にも指を屈る、湯本、宮下、塔の澤、何れも客
は絶えざらむ
流車は國府津をすて行きて、尙ほも山路に分け入りぬ、長の
旅路の徒然々々に、遠く望みて友とせる、三國一の富士が嶽
、流車の廂に遮られ、いかに便利の爲めといひ、廻る車の
早き爲め、客の眺を損するに、流石の流車も身を恥して、穴
へ這入ると墜道よ、入るかと思ひば又出つる、酒匂の川の鐵
橋を、越へれば我を松田驛、勾配はけしく登道、又もやくく
る墜道を、出つれば山北小山驛、須走道の追分の、御殿場驛
に登り多り、此處は名に負ふ土地高く、蓬萊山の登り口、海
を抽くこと千餘尺、身は浮雲に包まれつ、富士の高嶺を笠に
して、下れは佐野驛、沼津驛、恵比壽の神を奉つる、三島神社
は名も高く、千本が濱の松原は、天の橋にも譬ふべし、今は

驛路の鈴川に、鐵道馬車の便ありて、身延の客は下車なせり
名も大宮の御社は、富士の麓の表口、印も不二の製紙所は、
我國著名の會社なり、廣き裾野は兄弟の、其名は今に香はし
く、平家の逃げし富士川を、渡れは直に岩淵驛、海道一の風
景は、人も賞たへる田子の浦、古人の歌も忍ばれぬ、蒲原越
へて由井ヶ濱、薩陀峠の山道を、出つれば直に興津驛、浪穩
かなる清見瀉、彩る雲に夕日さき、眺めは一入あさやかよ
景色を三保の松原や、古も今も變りなし、清見ヶ關の清見
寺、江尻を早も過ぎ行けば、昔を語る久能山、入相頃み着せ
しは、靜機山と名の高き、東海道の沿岸に、浪靜岡の停車場
人々此處に下車なして、大東館に宿りける

寶臺院の鐘の聲、旅路の夢や覺そらん、明くれば空も晴れ渡
る、安部の川原や、手越の里、宇津の谷峠の山續き、空しく望
む暗の中、草薙掃ひし焼津カ原、藤枝驛も打越へて、島田金
谷を兩岸に、控へて流る、大井川、急とするは昔の旅路なれ、

嘶しに残る膝栗毛、今は空しく口の端に、かゝる例しのあり
とこは、治さまる御代の國民は、あらぬ虚言と疑はん、小夜
の中山夜泣石、墜道出で、堀の内、遙かに拜む八幡の、弓矢
は袋井中泉、三尺坊の權現は、空しく眺む森の中、龍捲き上
る天龍の、川を渡れば池田の宿、長者の娘の跡や何處、濱の
松風そよふきて、車内はいとく長閑なり、徳川武田の古戰場
引馬野の里は二里隔つ、琵琶湖と並び賞へらる、濱名の湖
の鐵橋は、舞坂新居の二里が間、眺めも飽かぬ夕げしき、風
を孕める白帆影、舟師が歌も耳立ちて、腸洗ふ心地せり、豊
橋御油は瞬く間、豊川稻荷は道遠と、景色に富る蒲郡、女郎
衆の唄に名を得たる、岡崎越へて安城驛、矢矧の橋は世に知
られ、刈部大府を過ぎ行けば、鳴海絞りや桶狭間、話の種は
澤多く、人の心も熱田驛、早夕暮になりしかば、名古屋の驛
に下車なしぬ、降れは豫ての知らせにて、山田の佐八神主の
岸田支配は出迎ひぬ、互に疲れを勞ひつ、其夜は宴を催ふ

とて、旅のつかれを休めたり、早寝る人もある中よ、吾は電車に身を托し、名古屋市内を運動す、流石三府に亞ぐ地ごと繁華は人を驚かせり

金の鯨后しんごに見て、明くる朝日の名古屋驛、一番發の列車にて伊勢の山田やまだに打向ふ、豊太閤の生れゑる、愛知の驛を過ぎ行ば長者ちやうじやうの名を得し、蟹江町、尾西線路の分れ道、彌富の驛やひ下車なせば、午頭なつがしらの社は程近し、四日市を左手ひだりにこり、河原田高官打越へて、龜山驛より乗り換へつ、伊勢は津でもつ城下を過ぎ、阿漕の浦に曳く綱の、度重なりし驛々も、早松坂の待つ間なく、伊勢の宮川打渡り、思ふ山田に着きければ迎ひの人に擁ようられつ、佐八氏宅に入りける、神都を踏し喜びは、早此時に兆きざしされぬ、全行中の老粹士、山田の驛やまだ下車なして、切符を改む其際に、名古屋藝子の刺を渡し、知らで得意に行過ぎしを、驛員えきいんのものは不審さに、問ひば氣附へて抱腹し、之れが當時の奇談となりぬ

さて恙がなき一行は、飛電を故郷に便りしつ、各々沐浴ゆづりに心を清め、神路の山の夕霞ゆふがき、祝酒を擧げて長旅の、疲れをうやまらひぬ

此の佐八の君は舊神職ふして、諸國講者の旅寓を兼ね、規模宏大にして客室など數寄をつくし、庭園の雅致亦見るべきものあり、此の地の屈指にかゝる舊家なりといふ

明くる日は早朝湯あさあそ浴して、豫て旅装の外ほかに調へたる禮服を着せ、午前九時と覺しき頃氏に案内せられて太々神樂を拜覽せり、今その次第を誌るさんに、此日は朝來神樂殿を潔齊粧飾し正面まへには菊の御紋章を染めぬきたる薄紫の幔幕をよき程より切絞きりぢりり、齊服を着けゑる宮司伯爵冷泉爲紀公以下神官、禰宜及び男女の奏樂士、十一人白の晴着に白の袴をつけたる舞子八人の着座しやくざあり、先づ神官幄舎あきに登りて御簾みすだを捲き揚あげ、祝詞いのちを上げ願主即ち講者の住所氏名を讀みあぐる此間は鞞鼓かぶつ、太鼓、琴、鳳笙ほうせい、龍笛りゆうふえ、箏そう、築等きくの樂器を和して樂士之れを奏

す、夫れより禰宜以下神饌を傳供す此間も亮々多る奏樂あり
續いて官司御弊物を假に案上に置き更に神前に奉り座よ着き
て祝詞を奏す、次に玉串を奉り拜禮畢て舊の座に復し禰宜以
下順次拜禮す、此時奏樂士并に舞子の歌舞あり人長舞と共に
ソノ駒ごいふ歌を奏す、又樂士の大和歌と共に神官太刀を提
げ大和舞を奏す以上了て御酒御會を撤す此間も奏樂を次に宮
司御簾を垂る一同順次禮拜して退出す前後凡そ一時間程なり
ソノ駒 その駒や吾れにわれにくさこふくさはとりかわ
ん水はとり草はとりかはん
大和歌 みや人のさせるさかきを吾さして

萬世までよかなであそばん

神饌の種類は和稻、荒稻、御酒、御魚、川魚、野菜、海菜、
水菓子、鹽、水等にして其品を擧ぐれば左の如し
鯛、鯉、鱸、鰻、香魚、干香魚、鱒、鰻、干鰯、干海參
干鰹、干鱈、干鮫、干烏賊、干梭魚、干鯛、身取鰻、玉貫

鮓、干鰯、干螺、蠣、蛤、鯽、鱈
枇杷、大角豆、荒海布、午葵、栗、干栗、海松、柿、干柿、
青苔、蜜柑、慈姑、蔬、芹、昆布、香橙、山葵、百合根、薯
蕷、獨活、胡蘿蔔、枝豆、梨、薑、蓮根、蘿蔔、橘、葡萄等
は其重なるものなりとす

此日は神樂拜覽を済したる後案内者に導かれて内宮外宮及び
四圍に鎮座し給ふ幾多の社殿に詣でたり

昔し里人は參拜の心得をいとも嚴かに守り來りしものなれば
參考の爲めここに記さん

- 一 頬冠りをなし、裾をかくけしまく域内に入るべからず
- 一 域内にて唾液を吐くべからず、大小便等は豫め心得べきと
- 一 外套の如きものは一切着用せざる
- 一 參拜の前に二見浦或は御川に於て潔齊をなすと
- 一 參拜の服装は男は白無垢の衣を着し中啓と稱する神拜扇を
携へ、女は穢れなき曠着を着すと

一履物は麻裏に限る、若し雨天なれば跣足或は草鞋を穿つと
一宮中にては冠物、鬘し傘等をなさざると
一忌服雜穢は伊勢服忌會により各々心得べきと
一臙汁の出つる腫物を生じたるときは参拜せざると
斯く心得を確守したりしも漸次時弊俗習に化せられて今は此
等の内二三項は全く有耶無耶に廢せられしものあり、殊に旅
の姿とはいひ、帽子首卷なごして参拜するもの或は浴衣、兒帶
の散歩の様よて参詣するものあるは誠に苦々敷事ごもなりこ
ある人は語りぬ、余等は豫め参拜の禮服を用意せしごとて眞
面目なりし

神都の案内

一の鳥居橋 皇太宮の表参道にして、城内の御地よゝ流るゝ川
に架せる橋なり、側に下馬禁令の制札あり
神宮司廳 一の鳥居橋を渡れば左側みなり
一の鳥居 参道の正面に在り、其高さ土際まで一丈九尺笠木

の長さ三丈五寸土際の直径二尺四寸末口二尺六
分あり

参集所

一の鳥居の内参道の左にあり、行啓の御時御休憩
或は御宿泊などに充つる所なり

祓所

参道の右にあり、大祓神武孝明の御遙拜等は此の
所よて行はせらる

手水場

祓所の南五十鈴川の岸にあり、風の宮の前より流
るゝ水と鏡カ石の方より來る流れとの落合なる
を以て川合が淵ともいふ、今の如く石を疊みて御
手水を遣ふに便になりしは、元祿五年徳川綱吉公
の生母なる本莊氏の寄贈にかゝる

二の鳥居

一の鳥居の参道にあり、官幣並に御勅使以下の一
行を淨め奉る大麻御盥の行事あり、其高さ笠木下
端より土際まで一丈七尺七寸笠木の長さ二丈八
尺四寸御柱の長さ二丈五尺直径二尺三寸末口二

御神樂殿

尺あり

參道の左にあり、諸人の志願ふより御神樂を奉奏し御饌を供へ進むる所なり、神樂は大中小の三種より別ち大神樂は舞子八人中神樂は六人小神樂は四人なり

御酒殿

御酒を醸もす處にして、五丈殿の北にあり前より藩堀の設あり

由貴御倉

五丈殿の東にあり忌火屋殿の前にあり、神官の御祓を修め奉る所なり

荒祭官遙拜所

參道に在り別宮の遙拜所なり

玉串行車所

參道の兩側に設あり

御贄調舎

板垣御門の南石段の下にあり
板垣御門の前より道を隔てて建てる御垣なり、長さ二丈高さ一丈東西南北の四ヶ所にあり

板垣鳥居

俗に第三鳥居ともいひ又荒垣ともいふ周圍に一丈の板垣を繞らし東西南北の四ヶ所に鳥居建つ板垣南御門に入れは右側即ち東方にあり、神宮の宿直せる所なり

外玉垣御門

第三重目にあたる御門にして、俗に十二ヶ所御門と稱ひ柱の數十二本あり衆庶の參拜は此御門にてす周圍九十六丈高さ一丈あり

中の鳥居

第四鳥居ともいふ、外玉垣御門と内玉垣御門との間にあり
中重鳥居の左右東西にあり、左は勅使掌典補の座

石壺

中重鳥居の左右東西にあり、左は勅使掌典補の座

四大殿

中重鳥居の左右東西にあり、左は勅使掌典補の座
中の鳥居の東右方にあり、奉幣の節官幣を點檢する所にして、長さ四丈廣さ三丈高さ一丈あり

内玉垣御門

二重目の御垣につきたる御門にして、俗に玉串御門ともいふ

藩垣御門

俗に猿頭の御門といふ、内玉垣御門と瑞垣御門との間に在り

瑞垣御門

又内覽の御門ともいふ、一重目の瑞垣の御門につきたる御門にして周圍五十丈高さ一丈あり

正殿

一に五十鈴の宮とも朝日の宮とも申し奉り、畏くも天照皇太神を祀れる大宮にして、御靈代は八咫の御鏡なり、垂仁天皇即位二十六年九月の御鎮座よして、宮居の造りは南面にして、萱葺堀立柱にして、大古の櫓を摸り、悉く白木造りの質素を旨とせるが故、神代の古事を想ひ出でられて其尊き方いはん方なし、其飽までも聖代の徳を守つて金碧を退けたる造り様こそ揺きなき國の宮柱と坐るに思ひを起し、肅然襟を正さしめ、自ら首の垂るゝが如き心地する、殿は桁行三丈六尺九寸、梁行一丈八尺にして高さ一丈あり、御屋根の千木は

内へ切を經木は十本、高欄の御飾玉は赤六、白五、青五、黒五、黄五の二十六顆にて御階の敷は十級あり

何の木の花とも知らずにはひかな

身にあまる風の薫るや堂の蔭

相殿神

は二座にして左は天手力雄命、右は豊秋津姫命なり

東西寶殿

寶藏ともいふ御幣の綿綾御神馬の鞍御調の糸等を納むる所にして、瑞垣御門の内みして正殿の後左右に在り、高さ一丈六尺、廣さ一丈二尺あり

北宿衛屋

外玉垣御門の外東側よ在り

北の御門

裏の御門とも稱ひ、正殿の後方に在り

御井

北の御門の東北に在り、神饌の御料に充てさせらる

外幣殿

板垣御門の外にあり、幣帛殿とも稱し、東宮、皇后宮の御幣帛を始め諸國の調荷前雜物等を納む

る所なり

御 稻 倉 外幣殿の南方に在り御料米を納め奉つる所なり

内 御 廩 御倉の南方に在り

外 御 廩 裏參道御橋の外にあり

裏見張所 裏參道御橋の西に隣して並べり

域内の御建物は總べて十四ヶ所にして、總反別六十七町三反四畝二十二歩四合九夕あり、境内老杉鬱蒼として繞り地清く箒の痕波輪の形を印して、一點の塵を止めず、幽靜にして其威嚴雅致いふべからず

神宮皇學館 は五十鈴川に架せる新橋を渡り行けば左側ま在り、近年新に一大校舎を新築し、教室書籍館、寄宿舍

御 藪 地 は度會郡西二里村溝口にあり、其反別一町三反一畝十一歩野菜并に果實の類を植えて御神饌に充てさせらる

御 藪 地 は度會郡西二里村溝口にあり、其反別一町三反一畝十一歩野菜并に果實の類を植えて御神饌に充てさせらる

御鹽殿神社 は縣道の左方白砂青松の中まあり、兩宮御料の鹽を焼き奉る所なり

征清紀念砲 は神苑道路の兩側に在り其右方なるは劉公島に於て分捕りせしものにして、二十三珊米突のクル

東宮御手植松 は其左側にあり、明治二十四年八月六日御參宮の折御手づから植えさせ玉ひとなりと

内宮神苑地 は明治二十二年五月神苑會事業の一として設けられしものにして、五十鈴川に沿ひ神路山に面して廣さ二町五反一畝三步あり、四時の花木色を競ひ其風景の佳趣愛せべし

内宮末社は十六所にして其鎮座地、祭神、桁梁、城内反別は左の如し

鴨下神社

度會郡東外城田村大字勝田一反八畝二十八歩

祭神 石己呂和居命

津布良神社

同郡東外城田村大字積良三反五畝二十八歩

祭神 津布良比賣命

葭原神社 同郡四郷村大字北中 一畝二十五歩 祭神 佐々津比古命 伊加利比古命
 小社神社 同郡下外城田村大字小社會根 三反一畝二十八歩 祭神 高水上命
 許母利神社 同郡東二見村大字松下 三畝一歩 祭神 粟島神御魂
 但正殿中絶神前神社御同坐
 新川神社 正殿中絶津長神社 御同坐 祭神 新川比賣命
 石井神社 同郡宇治山田町大字館町 一反七畝廿三歩 祭神 高水上命
 但正殿中絶津長神社御同坐
 宇治乃奴鬼神社 同郡四郷村大字楠部 十歩 祭神 高水上命
 但正殿中絶大土御祖神社御同坐
 加努彌神社 同郡四郷村大字鹿海 一畝一歩 祭神 稻依比女命
 川相神社 正殿中絶大水神社御同坐 祭神 細川水神
 熊淵神社 同上 祭神 多支大刀自神
 荒前神社 正殿中絶神前神社御同坐 祭神 荒前比賣命
 那自賣神社 正殿中絶津良神社御坐 祭神 大水上御祖命
 葦立豆神社 正殿中絶國津御祖神社御同坐 祭神 玉移良比女命

牟彌乃神社 正殿中絶御船神社御同坐 祭神 寒川比古命
 鏡宮神社 同郡四郷村大字朝熊 五畝五歩 祭神 寒川比古命
 以上御社 桁行 四尺六寸 梁行 三尺 祭神 未詳

内宮攝社は三十二所にして其鎮座地、祭神、桁梁、域内反別は左の如し

○朝熊神社 度會郡四郷村朝熊 四反七畝十八歩 祭神 大歳神
 ○朝熊御前神社 朝熊神社同域 祭神 未詳
 ○園相神社 度會郡宮本村大字津村 三反七畝二十歩 祭神 曾奈比比古命
 但二區ノ處一區中絶御同座
 ○鳴神社 同郡東外城田村大字山神 五反五畝四歩 祭神 石巳呂和居命
 但二區ノ處一區中絶御同座
 ○田乃家神社 同郡東外城田村大字矢野 四反七畝一歩 祭神 大神御滄川神
 △田乃家御前神社 田乃家神社同域 祭神 未詳
 但正殿中絶田乃家神社御同座
 ○蚊野神社 同郡東外城田村大字蚊野 六反二畝二十四歩 祭神 大神御蔭川神

△蚊野御前神社

蚊野神社同域

祭神 未詳

但正殿中絶蚊野神社御同座

○湯田神社

同 郡有田村大字湯田
一反十七步

祭神 鳴震御祖神

但二區ノ處一區中絶御同座

△大土御祖神社

同 郡四郷村大字楠部
一反三畝七步

祭神 大國玉命
水佐佐良比賣命

△國津御祖神社

大土御祖神社同域

祭神 宇治比賣命

△朽羅神社

同 郡東外城田村大字東原
二反九畝二十七步

祭神 千依比賣命

△宇治山田神社

同 郡四郷村大字北中
四反二畝十二步

祭神 山田姫命

△津長神社

同 郡宇治山田町大字今在家町
九畝六步

祭神 栖長比女命

△大水神社

同 郡宇治山田町大字今在家町
一畝十七步

祭神 大山罪乃御祖命

△堅田神社

同 郡東二見村大字江村
二反六畝

祭神 佐見都日女命

△江神

同 郡東二見村大字江村
一反三步

祭神 佐美川日子命

△神前神社

同 郡東二見村大字松下
一反八畝五步

祭神 荒前比賣命

△粟皇子神社

同 郡東二見村大字松下
一畝六步

祭神 淡海子神

△川原神社

同 郡宮本村大字佐八
七畝十二步

祭神 月讀神御魂

△久具都比賣神社

同 郡内城田村大字上久具
二反四畝二十步

祭神 久求都比賣命

但三區ノ處二區中絶御同座

△奈良波良神社

同 郡下外城田村大字宮古
一反八畝七步

祭神 那良原比賣命

△棒原神社

同 郡田丸町大字上田邊村
二反四畝一步

祭神 天須婆留女命御魂

但二區ノ處一區中絶御同座

△御船神社

多氣郡西外城田村大字土羽
一反九畝二十步

祭神 大神乃御蔭川神

△坂手國生神社

度會郡田丸町大字上田邊村
三反三畝十七步

祭神 高水上命

△狹田國生神社

同 郡田丸町大字佐田村
二反四畝二十九步

祭神 速川比古命

△多岐原神社

同 郡瀧原村大字三瀬川
二反三畝十九步

祭神 眞奈胡神

以上

○印御社

梁桁行 七九尺尺

△印御社

梁桁行 四六尺尺

内宮の別宮は九ヶ所にして社名鎮座地及び域内反別社祠の桁梁は左の如し

荒祭宮皇太神宮 域内に在り桁行二丈一尺三寸梁行一丈四尺

風日祈宮 皇太神宮域内ニ在リ桁行一丈四尺六寸梁行一丈二尺三寸
 月讀宮 度會郡四郷村大字地中に在リ域内反別四町二反五畝十五步桁行一丈八尺四寸梁行一丈二尺三寸
 月讀荒魂宮 月讀宮域内に在リ桁行一丈四尺梁行一丈三尺
 伊佐奈岐宮 月讀宮域内に在リ桁行一丈四尺梁行一丈三寸
 伊佐奈美宮 月讀宮域内ニ在リ桁行一丈四尺梁行一丈三寸
 瀧原の宮 度會郡瀧原村大字野后に在リ域内反別六町三反六畝桁行一丈五尺梁行一丈一尺三寸
 瀧原竝宮 瀧原宮域内に在リ桁行一丈五尺梁行一丈一尺三寸
 伊雜宮 志摩國荅志郡磯部村に在リ域内反別一町五反四畝十八步桁行一丈七尺梁行一丈一尺五寸
 別宮所攝は八ヶ所にて左の如し
 若宮神社 瀧原宮域内に鎮座す

長由介神社 全じ

川島神社 正殿中絶長田介神社御全座

佐美長神社 志摩國荅志郡磯部村惠利原にあり反別三畝十一歩

佐美長御前神社四ヶ所 佐美長神社域内に在リ

御社の年中諸祭典は總へて三十七回にて、内大祭は十七回中祭十回遙拜式二回大祓八回なり、今其御日取を聞くに左の如し

歳旦大御饌	一月一日	午前四時
元始祭御饌	一月三日	午前七時
御饌	一月十一日	午前七時
孝明遙拜祭	一月三十日	午前八時
大祓	一月三十一日	午後三時
祈年祭	二月四日	正後
紀元節	二月十一日	午前七時
祈年奉幣	二月十七日	午後一時

神武遙拜	四月三日	午前八時
大祓禊	四月三十日	午後四時
風日祈祭	五月十四日	午前八時
神御衣祭	五月十四日	午前十一時
大祓禊	五月三十一日	午前五時
興玉神祭	六月十五日	午後五時
御卜	六月十五日	午前七時
月次朝祭	六月十六日	午後十時
月次奉幣	六月十七日	午前二時
月次奉幣	六月十七日	午後五時
大祓禊	六月二十日	午後五時
風日祈祭	八月四日	午前四時
大祓禊	九月三十日	午前四時
神御衣祭	十月十四日	午前十一時
興玉神祭	十月十五日	午後五時

御卜	十月十五日	午後七時
神嘗朝祭	十月十六日	午後十時
神嘗奉幣	十月十七日	午前二時
大祓禊	十月三十一日	午後五時
天長節	十一月三日	午後四時
新嘗祭	十一月二十三日	午前六時
新嘗奉幣	十一月二十三日	午前十一時
大祓禊	十一月三十日	午後二時
興玉神祭	十二月十五日	午後四時
御卜	十二月十五日	午後三時
月次朝祭	十二月十六日	午後五時
月次奉幣	十二月十七日	午後十時
月次奉幣	十二月十七日	午後五時
大祓禊	十二月三十一日	午後三時

此日の晚餐は古來よりの習慣なりとか、山海の珍味酒池肉林を
 づくし三の膳に向結むすひを添ひ、所狭きまで並べ、神饌は清淨なる
 白木の三方にそなへ恭しく整列す、されば一人にて疊二枚を塞
 く、以ていかに其鄭重に且つ至情周到なるかを推するに足るべ
 し
 今試みに膳の配置献立を左に示すべし



- 本膳イ飯。汁ハ坪卷鳥賊 銀葉 杏ニ山葵葵塩ホ鱈吸寄へしろの王仁ト魚子魚切身焼
- 二の膳イ二の汁。結魚切身 椎茸 蕈味 葉附鹹ハ折鶴日の出ニ猪口胡麻塩慈姑甘美ホ龜足ハ小角
- 三の膳イ三の汁魚すり身。小桶櫻肉たゝさハ刺身鯛ハ鮑貝盛ホ酢鹽ハ盃酢
- 向ひ詰イ海老の船盛。水水の物鮑水貝ハ引菓子二見浦形

外宮は山田を去る四丁程南にあり、豊受太神宮、瓊々杵命、天兒屋根命等の諸神を奉祀せる御社にして、雄略天皇二十三年の創立にかゝり、御廟の總べては内宮に差あるをなればこゝに省けり、外宮の神苑地より地方にあたるて農業館あり、明治二十四の建築に成り、農事の祖を仰ぎ奉る神宮に年々参拜せる農家子弟のため特に設けられしものにして、其部門を、農作物種樹、漁獵、牧畜、養蠶等に別ち、産物並に器具標本、摸形、圖書統計表を普く展列して衆庶の縦覧を供し、以て斯道の奨励を計れり、近來津市公園に設けありと、三重縣物産陳列所もこゝに移して一の工藝館を増設せり

高倉山の岩窟は國道の右に在り、豊受太神宮御山の總稱にして往時春日戸高座神の住み給ひし所なりと、岩窟は今猶ほ存して俗に天の岩戸といふ、入口は幅六尺高さ九尺ありて、奥行は五丈六尺に及ぶといふ

其由緒種々ありて説く所定らず

神宮祭主館 は山田の本町といふにあり、元慶光院の建物なり
維新後は神宮司廳となり、明治二十三年まで廳務を執れり後大
に修理し祭主官舎となして年々祭主宮殿下御參向の折御宿泊
に充てらる

神宮教本院 も全じく全所あり、明治十五年一月以後神宮教
管長の所轄し属し、全國に三十の支部教會を有し、其本院を東京
及び伊勢に置き教務を總轄す

豊宮崎 は岡本町の南に當れる一區の總稱にして四時の風景
に饒かなり、前面は水田なるが故、早苗の候は青海の如く、南は鼓
岳、鷲の峯、西は高神山、高倉山の諸山聳ひ、東は朝熊山、神路山、龍浪
八束、永代、八幡の群峯之に次ぎて、近く目を遮り、其風色此郷の屈
指よをれりといふ

豊宮崎文庫 は此地の圖書館にして有名なり
神都の名所は甚多し今その重なるものにして、余の杖を曳か
ざるものを擧ぐれば左の如し

神路山	内宮の御山	山田カ原	外宮御敷地
櫻木里	度會郡鹿梅村	藤波里	全郡佐八村
河邊里	全郡河崎町	須原里	一の木
岡本里	全郡岡本町	岩波里	全郡圓座村
山幡里	全郡中島	句の里	竹カ鼻
河原田里	全郡中村	宮川	度會川
錦小河	宮崎	加利佐峯	岩戸
尾垂峯	神路山の奥	御鹽山	全郡三津村
音無山	三津村	宇治山	内宮
藤岡山	外宮ノ西	瀧波山	岡本
伊氣浦	松下	伊勢ノ浦	志州ノ海
打越濱	一色村	千尋濱	松州ノ海
淡路浦	二見	五百枝杉	松州ノ海
千枝杉	外宮	百枝の杉	内宮

神都の土産は只參宮者の慰みものあるに過ぎず

鮑の粕漬、干海參、ひじき、赤福餅、太閤餅、柿、紙入、烟
草入、わかめ、めくみ、杉の箸、神箸、青海苔等は其重なる
ものなるべし

翌日は無事神樂を濟し社殿の拜觀をも了りたりて一行打揃
ふて世に高き古市の伊勢音頭に魂を飛ばしぬ
音頭の濫觴は遠く往古にありて、都も鄙も一般に歌垣にて春秋
に若き男女打交りて、音頭をあけて踊りをなせしが、此地は伊勢
踊りどて其遣風を行ひつゝ來りしを、寛延の頃備前屋の主人感
ずる所ありて今の如く仕組みたりしと、今は觀客の褒賞する所
となり、せり上げの舞臺さへ設けて、窈窕たる子女盛装して、都の
花の名所を音頭にあけ歌舞し和して踊りをなす、其様興なしと
せず、古しより參宮者の此の地を遊ぶは一般の常として殆んど
慣習なるが如し

彼の俗説に名高き油屋は此地にあり、元有名なる妓樓にして、古
市三大樓の一に居れり、今の主人祖先以來の遊女屋を廢して旅
館をなせり、今は貴顯紳士の賓客多しといふ、演劇にていふ油屋
騒動は實にこの家なり、館の後ろに大林寺といふあり、此寺院に
三世阪彦丈の建てし遊女御紺の碑あり
歸途五十鈴川の清流に昔を吊ひぬ

人心かう清かれと御裳濯川 凌雲

此川は一に御裳濯川ともいふ、昔往天照皇太神の二見を経て
御身を此處に清め給ひしなりといふ、其河口に宇治橋といふあ
り頗る幽邃の地にして且つ清き谷川の水なれば河岸の風物皆
倒まに映つり、道行く人の足をこごむ、此川には河鹿と呼ぶ虫
棲めり、形酷だ蛙に類ひし、色黒く癩癩ありて指先き圓く平たし
其聲清く美しくして多く幽雅なる池水に産すといふ、此虫は甚だ
稀なるを以て、好事者は之れを愛翫して池庭に養ふものあり
又此邊は乞兒夥しく各な參宮者に袖乞として口を糊らす、人試み
に端錢を河中に投すれば、綱受けとて彼は綱の如きものを竹の
先きに附けて巧に之れを受く、百投百受過つとなし

其由來を尋ねしに、昔信長の家臣某主人没落後二君に見えざるの節義を守り、浪人きて此の地に來り生計の助けに竹の竿よ編笠を附けて人の投錢を受けたるよ始まりしなりといふ、世に伊勢乞兒こはこれよりいふにやあらむ

余等は此等の些事よ旅の無聊を慰めつ、歸寓せしは黄昏たそがなり

翌日は夜來の星火全く欺かず拭ふが如く晴れたれば、神都の山水を慕はんと、豫てより宿望せる二見の浦に打向ひぬ
二見の浦としいひば、よく人の知れる勝地なり、一名二見潟ともいひ里人は二見の沖といふ、高濱より打越が濱を経て立石崎に至る間を總じて稱ひり、岸の左右數百歩が間は少しく丘陵にして、上に青松生ひ茂り、低き處は石垣もて壘み、一方は清く瑠璃の如き海原渺茫として際涯なく、氣清く水澄みて蒼波に身を映さべし、若し夫れ女浪男浪の起伏して、一度ひ岸を洗ふに逢ひば白波は巖に激して泡を噴き、其爽快なる得もいひしらず、所謂

陰陽の岩は其裡に突出して、陸と相離るると僅に數十歩其大なるは高さ三丈周圍十三丈小なるは高さ一丈二尺周圍三丈よとて、兩間に注連繩ぬりなを張りて遠く海中よ在る興玉石を拜せ、其又側に小供石とて鯨石、鼻石、雞冠岩、屏風石、獅子岩等班らに浮べり

涼しさや女浪男浪の清き音

凌雲

時應よ夕照曦々として、波濤を照らし、異彩なる光はたなびく色雲に相映じ、涼風軽く身を掠め、清風徐ろよ腸を洗ひ、心神爽かに轉まる仙郷にあるの觀あらしむ、其風光の明媚なる畫も亦及びひがたく、人は一幅の畫中にありてその畫を知らざるなり
斯る勝地に臨んでは、歌詠む人は思ひを焦し、筆執るものは惱むべきも、余等一行は孰れも無雅のとこて憾めとき限りなりし、
此の海濱に賓日館とて名ある旅館あり、先年 皇太后志州島羽へ行啓あらせらるる折行在所に充てられしといふ、之れに隣りして清渚亭といふあり、海水浴を兼ねたる割烹店なり何れも風趣ある建物よ見ゆ

かくて春の日の長しと思ふ間もあらで、夕陽の光り漸く淡く既に沈まんとし、遠寺の鐘の音さへ歸路を促がしければ、愛を割き情を残して館へ急ぎぬ

明くる日も幸ひ曇らねば、嘗て絶景なりと聞きし朝熊山も二三の者を誘ひ嚮導者を雇ふて打ち出でぬ、此山は志州に跨り内海に臨み高さ海面を抽く千七百尺餘、山麓廣ければ左の道をとるこそ便宜ならむ

山田より登る道に四ヶ所あり

一 宇治郷岩井田山よりす、行程七十二町あり但此處には一町毎に石の目標あり

一 楠部峠よりす、行程七十二町餘あり

一 宇田の峠よりす、行程四十四町餘あり

一朝熊村よりす、行程三十二町餘あり

山中森林蒼々として且つ櫻樹多ければ、其季節を思ひやられぬ蔚々たる古木は山道の峻なるに和らして膽を冷やし、雜草地に滿

ち荆棘樹木の根を蔽へり、蓋し余等は平坦なる山道あるを悟らざりしなり、余は豫め其心して輕装し草鞋を穿ちて登山しぬ、暫くありて余等と呼んで登り來るものあり、顧れば山路を踏み惑はじと豫て佐八氏の篤志により雇ひ來りし案内者にして此處まで道を異みせるなり、余等の托したる荷物を肩よして意氣毫も衰はず、此處は嶮路なれば道を轉ぜらるべしと注意ありしが、此所まで登り詰むるとなればさて、尙ほも進み行き、少時叢林を過ぎ登れば山嶺にも覺しき處に龜なる人家の二ツ三ツ木立ちの影より隠見え、嚮導者に問ひば茶店なりといふ、喘ぎ居たる余等は爲めに氣頓みよ勇みて豆腐屋といふ茶店に草鞋の紐を解き濫茶に咽喉を潤して、足の疲れを慰しつ、女中に土地の名所噂断など聞きしが、關東とは違ひ面白きと多かりし、此邊は少しく芝生なれば四望悉く眼下に落ち一面は群巒遠く連なり一面は水天の翠を凝らと、近くは翻々たる漁船の波間隠見するあり、白帆遠く黒烟を吐くもあり、そよふく風は清く耳の垢

を洗ひ、其美觀山水の畫幅を見るの心地し、實に再び逢ひがぬき佳興にてありき、此山は東海道の諸國を一目に見え得る勝區なりと、蓋し巫言にあらず、少時ありて草鞋を締め直し、茶店を辭して山頂に達しぬ

中程に金剛證寺にて禪宗の寺院あり、鎌倉の健長寺派なり、欽明の御宇僧教待なるもの、創開せし處にして、天皇此山に行幸あらせられし際、伽藍を御創營あらせらる、後ち大同の年、中興の開山として、僧空海登山して、本尊虚空菩薩を安置せりといふ境内、廣くして東西二十町、南北十數町にも餘るべし、前年本堂火ありしかば、當時その再築の計畫中なりと聞き、余等も瓦數十枚を寄進してけり、傍らに文珠堂、明星堂、孝源院、釋迦堂などいひる佛閣あり、天王門の燒跡を過くれば、連珠の池とて小池もあり、吞海庵は一に奥の院ともいふ、數十丈の峻崖に石を疊みて富士見臺を築けり、本山第一の眺望なりといふ、四隣の群峯、我と應答の間に聳ひて招くが如し、淡黒もて畫ける如き遠山、容色よき尼

が昨、日、今日、剃刀をあてたらんが如き、緑りの峯、各な夕陽を浴びて、其趣き更よ一段の妙あるを覺えたりき

海を呑む茶の子の餅や富士の山

一 休

之れ即ち一休法師の名句にして、此の庵、こゝもに名高し、余は此山頂にある萬金丹の本舗を訪ひ、少と計りを求めたり、店主の語るに、諸國の行商は一人も脈出せずと、啣ち多るが、余は始めて從來地方に横行するは皆偽りなるを知れり

かくて歸途先きに立寄りし茶店にて酒興をかりつ、眸裏の景色みあくがれて、日の行暮るに驚きつ、膚寒からぬ輕風に思ひを殘して、降りしは夕日影の已れが帽ふ落つる頃なりし

余等の山田滞在四日間にして、ほぼ觀光を終りたれば、翌日は朝影の障子の目を二ツ三ツ餘す頃、佐八氏に名殘を告げ、深く高意を謝し、山田發の列車に搭じて再び長の旅路に就けり

一行の内之れより歸途に就かんといふものあり、或は洛地に向はんといふものあり、車中の協議區々なりしが、やがて余と二三

名は歸省すべく、他の諸士は皆京坂地に向ふとに定まりければ、津市に於て袂別の小宴を張るところなり、此處に一同下車をして津公園に休憩せり。

此公園は當國有名なる公樂場にして、市街の北方に方り舊藤堂氏の別荘なりとを、明治十年市公園となし其一隅に祠を建て、高虎の靈を祀れりといふ、中央に博物館あり園中廣くして、一面は伊勢灣に臨み櫻樹躑躅多く風色愛まべし。

世に有名なる阿漕川浦は市の東津興村の海濱にして、白砂青松風致に富めりといふ、往古太神宮の鰐魚を獲りし所にして土人の漁りを禁せり、俗譚に阿漕平次なるもの毎夜竊かに網を下ろせしが、事露れ、簀卷の儘海に投せられしといひ傳ふ、後ち里人祠を設けて其靈を祭るといふ。

余は公園を辞えて津商業會議所を訪問し、刺を通じて書記長に面し親しく視察せり、市は人口三萬餘商業繁盛にして三重縣廳裁判所銀行會社等あり、物産は綿木綿、紙、茶等を出せ、夫れよ

り余は直に停車場へ馳せ附け、豫て待合せられし諸士と共に乗車し關西線路の分岐點たる龜山驛まで各々離別し豫て、日本武尊の御陵を拜せん、車中期する所ありて個人高宮驛に下車し里人に道を尋ねつて、先づ笠殿神社といふに參詣せり、社は停車場を去る南約十町程の山中にあり、尊の東征に用ひ給ひし御笠を奉祀せり、梅毒者の參詣引きも切らず、鳥居繪馬の如き幾万なるを知らず其盛なる想ふべし、又高津瀨村大字名越と呼ぶ部落に尊の崩し給ひし能褒野カ原あり、此處に小なる古びたる祠あり、其側に南面して白鳥の塚といふあり、雜草古木四圍に滿ち荒廢の状坐ろに隣れを催ふしぬ、古來尊の御陵と唱ふるもの二三よして足らず、明治十二年其筋の檢査ありしより之れを以て愈々御陵墓と定めらる、余先年西都に遊ひしが、舊跡御陵に富める地とて荒寥たるものをも勘からず、應さに之れと感を同ふして憮然多りしとありき。

と一ツ能褒野に薫る野菊かな

凌雲

之れより一町程を隔つる女坂といふに能褒野神社あり、社殿の新らたに見えければ、こある人に問ひしに、元廣々たる原野中ふ埋没して規畫を經理するものなかりしが、明治二十七八年日清の戦役に名古屋師團兵出帥の際、尊の武威を慕ひて祈誓せしが、戦勝凱旋の後其高德を報ひんが爲め、軍團の寄附を以て創築せられしものなりといふ、輪奐の美なく規模の壯なりと雖も、清素の様亦以て崇敬の念を生せしむるに足る、地偏するを以て問ひ來るもの少きは憾みこなき
西福寺といふは高宮より二十町程を隔つる石薬師宿に在り、神龜年中僧泰澄奇石を獲て之れを本尊として一字を建立し、後弘法大師此の石に醫王尊の像を刻み、嵯峨帝の勅願寺となる壽永年間源範頼戦勝を此に祈願せしなりといふ、境内に蒲櫻にて名なる古木あり、余は此等の社閣舊跡を訪ね終りて四日市に至り其日は旅館十九村屋に投宿せり
翌日は腕車を驅て全市の商業會議所を訪ひ、庶務の要項、市内輸

出入高、金融事情、營業税法等の件々を取調せしか、津市より百事整理し得るころありき

市は津に比して人口其他に於て着輸すると雖も、位置伊勢灣に面し且水深くして大船の停泊に便なるが故、本邦開港場の一に居れり往來頻繁し物貨輻輳し商勢隆昌なる市邑なり、余は會議所を去り三重村なる製絲所及び四日市製紙會社を巡覽し之れより再び乗車して彌富に到り、尾西鐵道に乗り換へつ、佐屋を経て津島驛に下り津島神社を拜せり、社は午頭天王を奉つれるものにて、社殿宏大に且つ精美を極む毎年舊曆六月十五日祭禮を行ふ、尾州に於て名高き祭典なりといふ、余は之を饗して、本線に引返り名古屋市をきぎ熱田神社に詣つ、御廟は即ち日本武尊を祀れるものにして、御神体は草薙寶劍なり、景行天皇御宇の鎮座にして、後ち天智天皇の御代皇都へ遷されしも十九年を経て天武帝朱鳥元年に再び此地に復さる、社城宏大にして大小の祠數十其内にあり境の八方に華表を建て、石

橋海藏門、鎮皇門、春敵門、渡殿、釣殿、祭文殿、回廊拜殿、勅使殿等あり
祭典よは 勅使官幣を奉じて、儀式慎儼鄭重なる祭禮なりとい
ふ

白鳥の塚は熱田白鳥町なる法持院といへる寺院の本堂の裏に
あり 尊の東征して伊勢國に薨じ玉ひ後ち朱鳥年間草薙劍を
熱田に祀れる時此村に給ひし太刀、鉾、鏡等を封じて此處に其神
靈を祀るに際し 尊の靈白鳥と化し能褒野ヶ原を翔揚し給ひ
しより此名ありといふ、境内老樹蒼鬱として日光を洩さず晝猶
ほ暗き仙寰なり

此等を拜し了りて大府に至り、世に有名なる古戰場桶狹間なる
今川義元の墳を訪ねんと車を急かせり 時早入相に近ければ
獨り野邊を行くは何もなく心淋しく木の間に洩る山寺の晚鐘
も一入憐れに寂しきを添へぬ、墳は鳴海より東一里計りを隔つ
る有松と落合との間あり、陰々たる古松の下に豎三尺巾二
尺計りの古びたる碑あり、今川治部太夫義元之墓と書せり、諸處

摩滅して苔さへ充ち更に威徳を失ひぬ、其側に大將の墓とて十
數本何れも見そぼろしき碑立てり、又阿彌陀の如き石像二三本
あり、首も折れ手もなくて神ごも佛ごも信ぜられぬ程にていこ
く哀れよ見え多り、之れと數十間を経て一寺院あり、明治二十
九年四國高野山より出張せしなりといふ、内には墳墓の老松と
齡を争ふ老僧ありてイソソとして余を迎ひ出で邊りの舊所
に就き委かに由緒など説きぬ

頃は元祿三年義元大軍を率ひて清洲を衝き上洛せんとせるを
信長聞きて諸將を遣はし出禦はしめ多るに、今川の勢ひ悔るべ
からず、諸壘相續て陥る、義元勝に乗じ進で桶狹間に陣す、信長諸
軍に命じて間道より夜お乘じ、直に義元の本營を襲ふ、此夜會々
風雨烈しく今川の軍兵は皆悉く甲を解き酒を被り連日の勝利
を祝ひつゝありしが、信長の兵其帳下よ迫り吶喊相呼で猛進し
ければ敵兵狼狽爲す所を知らず終に信長の軍兵よ殲されたり
といふ、嗚呼今は空しく桶狹間の松の下露冷かなる斷碑の下

に英雄の魂は眠ねめり

虫啼くや夕日の洩るゝ古碑の影

凌雲

聽て時計の針の早七時を示せるに驚きて僧侶に少し計りの資を與へ、桶狭間合戦記などいひる小冊を買求めて車を返しぬ途上一農夫ありて今彼處の山中ふて賊に追はれしものありと余に告げしかば、さらぬと日日は早全く行き暮れ、四方の草叢にすだく虫の音さへ心細く思はれければ、車夫は聞きて懼れとて車を急に早めとはいと笑止の至りなりし

此日は大府驛の成田屋といふに一泊し、明けの日土地の名産たる鳴海絞りを買求め再び上車して豊橋より分岐し豊川稻荷を參詣せり、この祠は妙嚴寺地中にあり、嘉吉元年の建立にして豊川陀^ガ枳^キ尼^ニ天^{テン}と稱し、信者頗る多し、境内廣く風光愛すべき夫れより直に豊橋驛より引返し、全地の商業會議所を訪ひ會頭に面して視察せり、濱松は有名なる製茶の産地にして、商業振へり、會議所は敷知郡部と併合して設置せしものなりといふ、

余は此二都の市況をさぐり、且つ先年見洩せし舊跡佛閣も訪ねて心癒たれば、之れより直に歸郷より向ふべく新橋行きの列車に搭じて上りぬ、今の世の旅は眺め樂みも自から淡きに幾度か古人の破笠青鞋を思ひ出でられて、火輪の早きを感みたる沿道の光景は、嬉しくも再び我前に現はれ、左右に熨したる無情の草木も、風に揺られてさながら余を迎ひ送るものゝ如し

かくて國府津の停車場に着せしは夜の九時にも近ければ大磯み下車して、舊冬病を得て此地に保養せらるゝ上野松次郎氏の別墅に入りぬ

此夜は長の旅路に心も疲れ果てゑるに、氏の許さへ宿れるとて氣やすらかに早歸省せし心地して、余が途上會議所を視察せし報告(氏は宇都宮商業會議所會頭)參宮中の雑話に時を遷せは會々一輪の殘月は鮮光萬里を照らし、水と光りを鬪はして恰かも二個の月あるが如し、遠く沖に宿れる船は篝火を燭らして漁りするなど、其様得もいはれず、涼しげに軒端を渡る松風は心よ

浮ぶ百端の塵を拂ひ、氣爽かに旅路の感も頼みに消せて磯の夜景に夢を結べは、唯波のひびきのみ冴えぬり
翌日は海濱に遊び磯の土産物など購ひ、其日の午後三時といふに入京し、日本橋區の池新方に一泊しつ、明くる日市中二三の用務を済して、歸郷せしは日暮なりき
此樂みなる旅行前後僅かに十有餘日 昔の伊勢參宮はあたかも今の世の異國へ洋航するが如き心地にて、東海道五十三次の宿場へに足豆を勞はりつ、山河を越へ坂を辿りて間々には横へ働く雲助の寢垂言を聞きつ、敷匂を要してすら、猶ほ遅れ馳せのものに得意がりし世の中が、吾妻と浪華が間も長蛇の車輪に身を任せれば、僅か巻煙草を燻らす裡に往來と得る文明の御代、昔の様も彌次喜太にて織かに其一班を覲ふ當代の民人は誰れが明治の高徳を思はざらんや、實にや昭代の惠みの露もぬるゝこそいとも畏き極みなれ

神都のみやけ(終)

他日本誌に併せて京坂、南海及び九州地方を巡遊せし記事をも續稿するところあるべし

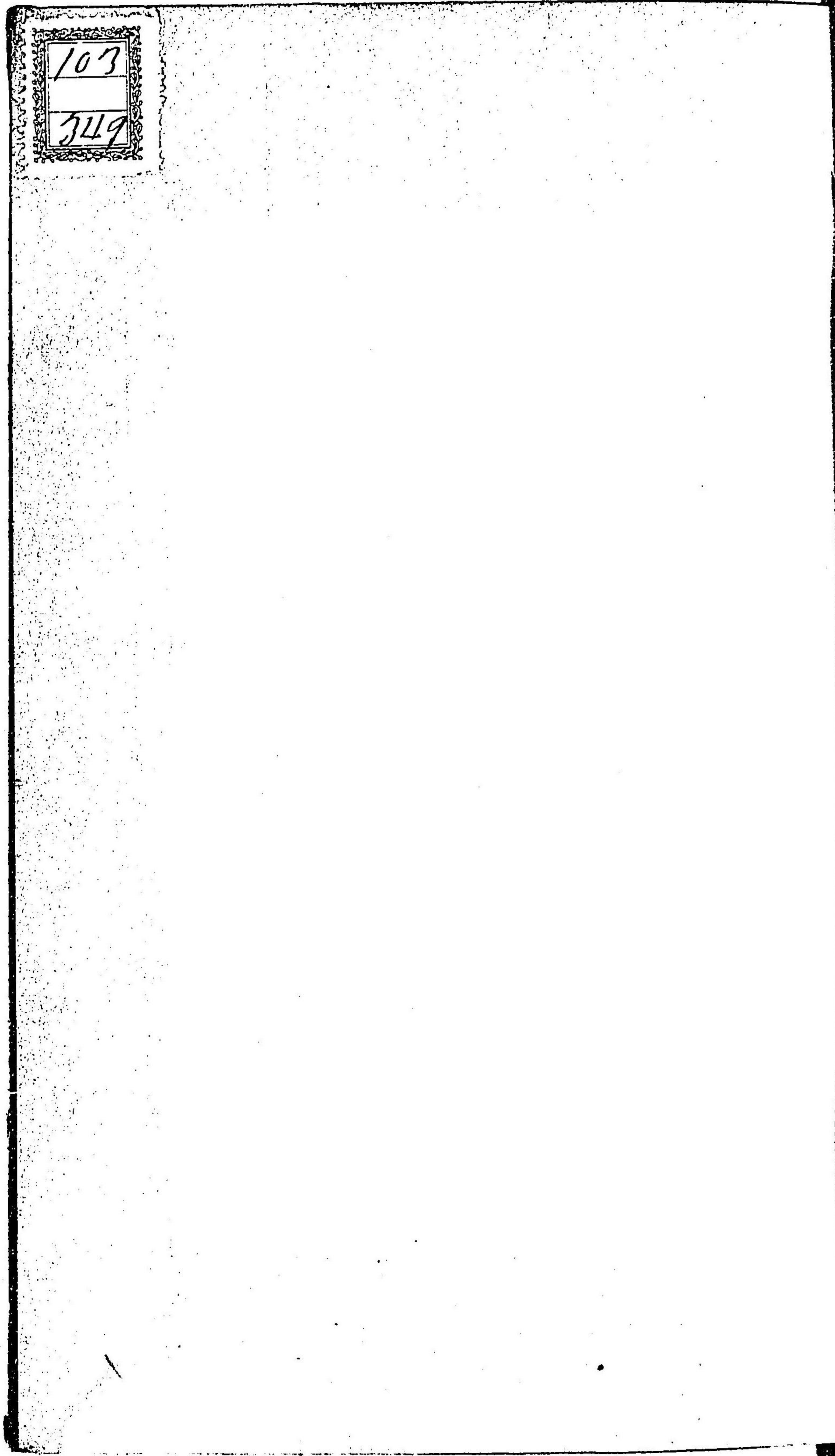
明治三十四年十一月廿八日印刷
明治三十四年十二月一日發行

坂上五郎

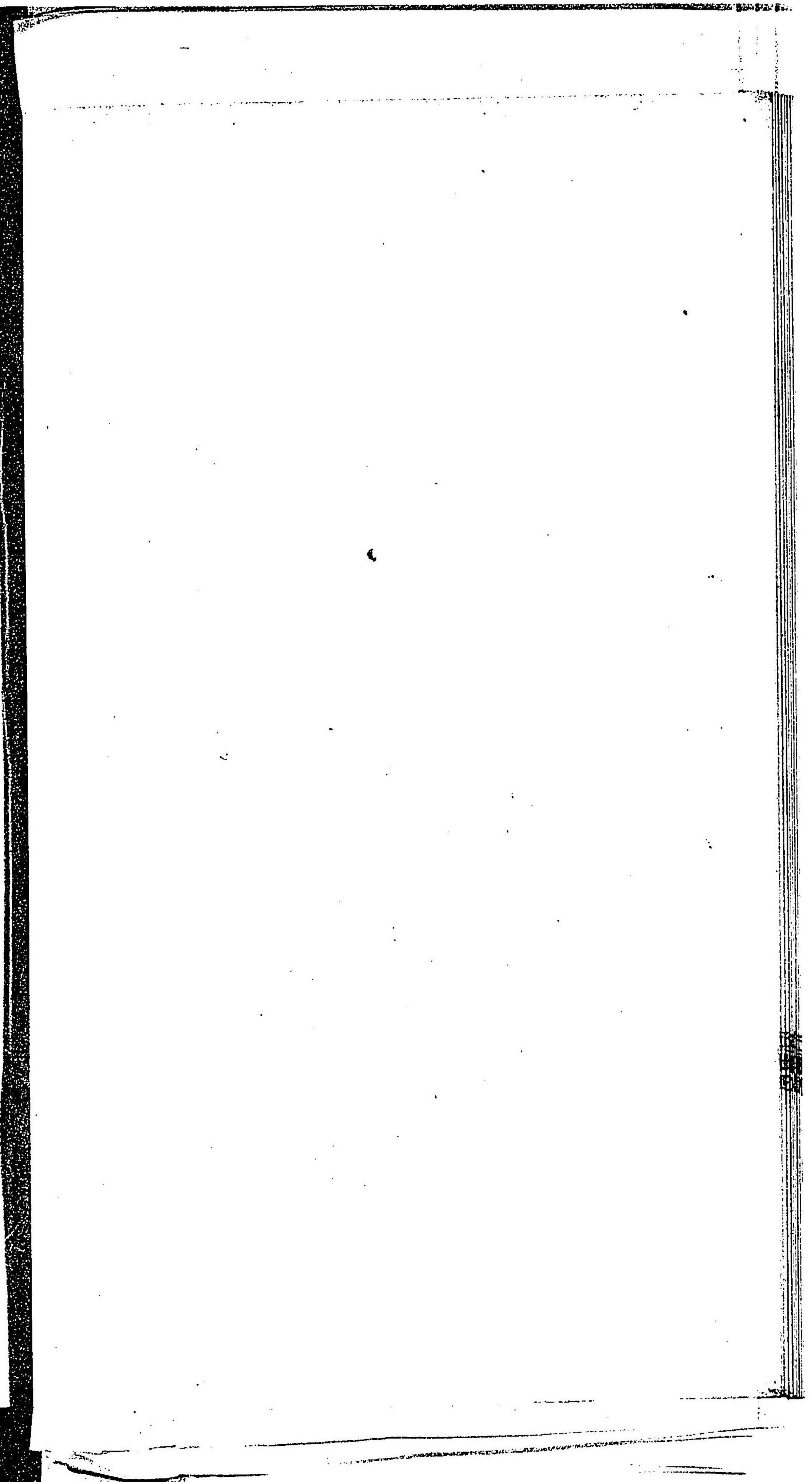
編輯人兼
宇都宮市千手町壹番地
相場直三郎

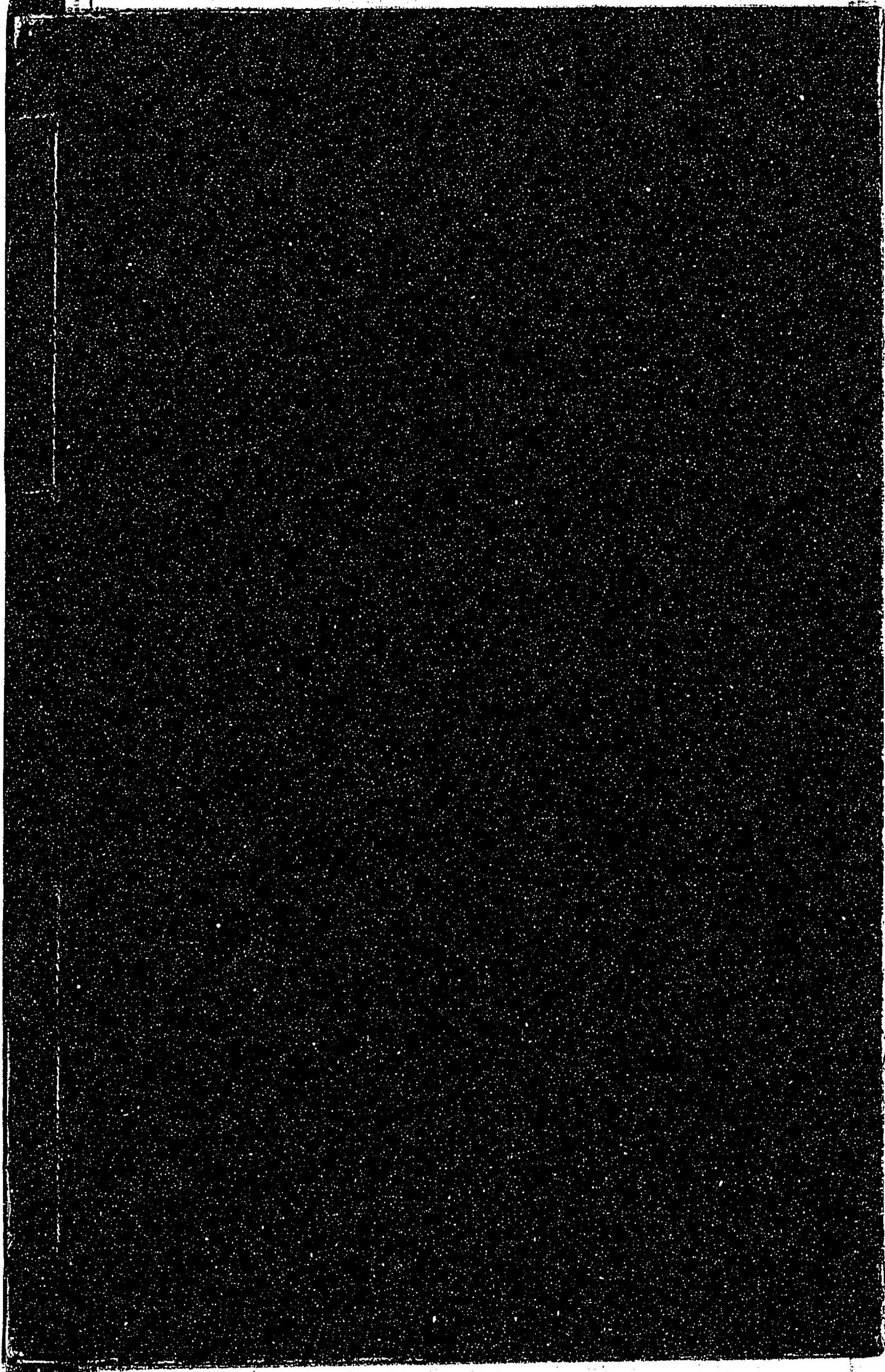
印刷人
宇都宮市杉原町廿九番地
福田伊兵衛

發行所
宇都宮市千手町壹番地
凌雲堂



103
349





103
349

025500-000-2

103-349

神都の美やけ

相場 直三郎 / 編

M34

ADC-2959

